

令和4年度の東北地区スモン検診結果

千田 圭二 (国立病院機構岩手病院 脳神経内科)
高田 博仁 (国立病院機構青森病院 脳神経内科)
青木 正志 (東北大学 脳神経内科)
豊島 至 (国立病院機構あきた病院 脳神経内科)
鈴木 義広 (日本海総合病院 神経内科)
松田 希 (福島県立医大 脳神経内科)

研究要旨

令和4年度の東北地区スモン患者の現状を調査した。検診受診者は40(男12、女28;来所6、訪問7、電話24、書面3)人で、年齢は61~100(中央値82)歳であった。COVID-19流行による対面検診の減少分を非対面検診で補完できたため、受診率(63.5%)は昨年度より大きく増大した。患者群の動向は、従来指摘されてきた障害の重症化と介護の高度化の延長線上にあると考えられるが、受診率の高かった2020年度の結果と比較して、その傾向が高止まりしていることが示唆された。

A. 研究目的

令和4年度(2022年度)の東北地区スモン患者の身体状況、医療、日常生活および介護について調査し、その現状と動向を把握する。

B. 研究方法

東北地区の班員を中心に県ごとにスモン患者に連絡を取り、2022年9~10月にスモン現状調査個人票を用いて身体状況、医療、日常生活、および介護・福祉の状況を調査した。従来の対面検診(来所、訪問)を可能な範囲で行い、代替手段として非対面調査(電話聴取り、書面郵送)を積極的に併用した。各班員から地区リーダーに送付された個人票とデータベース管理担当班員から送付された集計資料とをもとに、2008年度以降、特に2020年度¹⁾と比較しながら東北地区スモン検診受診者群の現状と動向について検討した。

C. 研究結果

1. 受診者と検診形態

検診受診者は合計40(男12、女28;青森3、岩手9、

宮城7、秋田8、山形8、福島5)人であり、受診率は63.5%(=40人/支払い対象者63人)であった。年齢は61~100(中央値82)歳であり、65歳以上97.5%、75歳以上72.5%、85歳以上が35%であった。検診形態は対面13(来所6、訪問7(自宅6、病院・施設1))人、非対面27(電話聴取り24、書面郵送3)人であった。検診形態は県ごとに違いがみられ、青森県は書面主体、岩手県は対面主体、山形県は対面と電話が半々、秋田県は電話主体、宮城県と福島県は全員電話であった。訪問検診率(訪問検診者/検診受診者)は17.5%と低率であった。

15年間で手当受給者が155人から63人(40.6%)に減少したが、受診率は向上している(図1)。来所検診が著しく制限された2021年度に比し、今年度は施設への訪問健診が著しく制限されたが、他の検診形態は増加した。受診率63.5%は昨年度より増大し、2020年度に次いで大きい値であった。85歳以上の割合35%は、2020年度37.5%よりわずかに減少した。

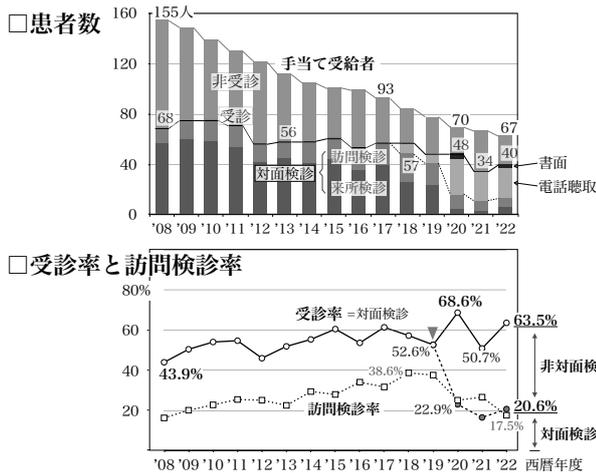


図1 患者数、受診率および検診形態

2019年度までは対面検診のみ（三角印）。

2020年度から非対面検診が正式な検診として集計されている。

2. 身体状況と医療

スモン主要症状の重症の比率は、視力「全盲～指数弁」が15.8%、歩行「不能～車椅子自走」が27.5%、異常知覚「高度」が27.3%、胃腸症状「ひどく悩んでいる」が14.3%であった。身体的併発症は全員が有しており、「現在影響あり」が10%以上の併発症は、白内障（12.5%）、心疾患（10%）、脊椎疾患（12.5%）、四肢関節疾患（10%）、腎泌尿器疾患（10%）と多数であった。精神症候は79.5%が有し、現在影響のある記憶力の低下が12.8%、認知症が10.3%であった。

診察時の障害度は、極めて重度3人、重度8人、中等度17人、軽度6人、極めて軽度2人。障害要因はスモンが12人、スモン+併発症が25人、併発症が1人で、スモン+加齢はいなかった。長期入院または入所の割合は23.5%であった。治療は95%が受けており、内訳はスモンの治療12.5%、合併症の治療85%であった。

スモンの主要症状について重症の比率の推移をみると（図2）、2020年度と比べて視力と歩行では増大し、異常知覚でほぼ同じ、胃腸症状で減少した。診察時の障害度と療養状況の 카테고리比率は2020年度と同様であった（図3）。

3. 日常生活動作および介護

一日の生活は、一日中寝床3人、寝具上で身を起こす1人、居間・病室で座る15人、家や施設内を移動1

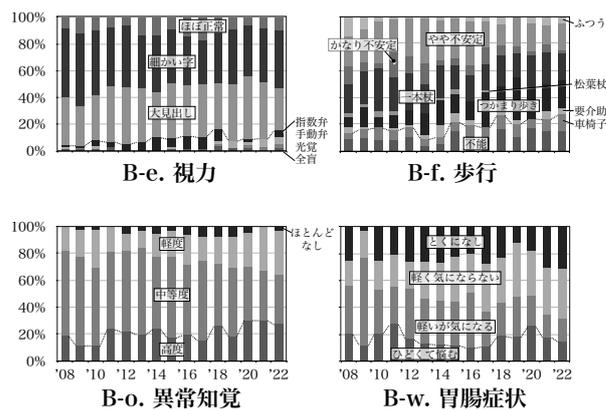


図2 スモンの主要症状

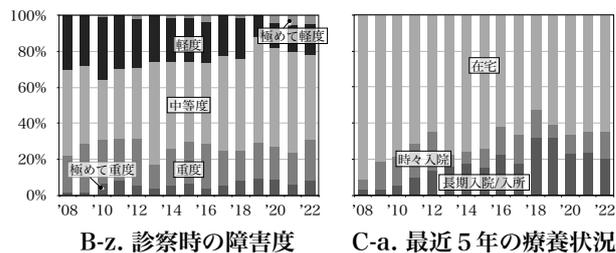


図3 診察時の障害度、最近5年の療養状況

人、時々外出11人、ほぼ毎日外出8人であり、Barthelインデックスは0～100（平均72.7）であった。転倒は最近1年間に16人（40%）が経験し、骨折が2人に2件（手首1、趾1）起こった。一人暮らしは20人であった。

介護状況は、毎日介護11人、必要時介護16人、介護者がいない2人、介護不要11人であった。介護保険を申請していた27人の認定結果は、自立が0人、要支援1が3人、要支援2が4人、要介護1が6人、要介護2が5人、要介護3が3人、要介護4が4人、要介護5が2人であり、認定結果が低いとの評価が25.9%を占めた。56.4%が介護に関して不安に思っていた。不安の内容は、介護者の高齢化22.7%、介護者が身近にいない13.6%、介護者の疲労・健康状態13.6%、介護者が十分時間を取れない9.1%の順に多かった。介護度が増した場合の療養の見通しは、施設へ入所30.0%、介護と介護サービスを合わせて自宅30.0%、入所中施設22.5%、介護を受けながら自宅12.5%の順であった。

2020年度と比較すると、今年度の「一日の生活」では「時々外出」と「家や施設内を移動」の比率減と、

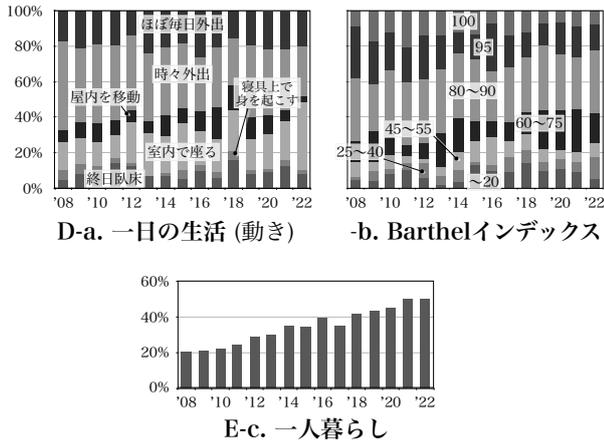


図4 一日の生活、Barthel インデックス、一人暮らし

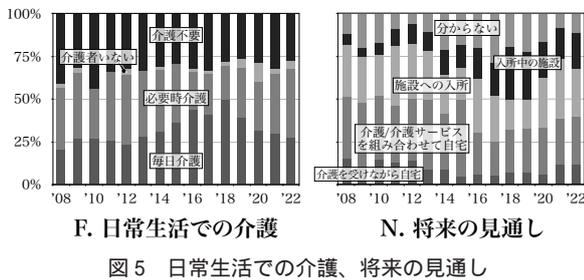


図5 日常生活での介護、将来の見通し

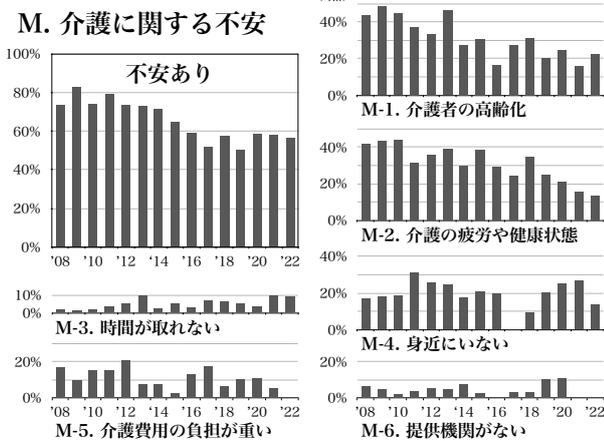


図6 介護に関する不安

「居間・病室で座る」の比率増が目立った（図4）。Barthel インデックスの各比率はほぼ同じであった。一人暮らしの比率は増加傾向にあった。日常生活での介護では必要時介護の比率が増大した（図5）。療養の見通しは「分からない」と「施設への入所」の比率が減少し、自宅の比率が増大した。減少傾向にあった「介護に関して不安に思う」割合は、2020年度にやや増加した後、横這いになった（図6）。

D. 考察

東北地区のスモン検診は COVID-19 流行による影響が大きく、特に 2021 年度は対面検診が著しく制限され、その減少分を非対面検診で代償できず、検診率が大きく減少した²⁾。流行が続く中、今年度は対面検診が部分的に実施できた。訪問検診、特に施設への検診が減少して、訪問検診率は 2008 年度³⁾以来ひさしぶりに 20%を下回ったが、その減少分を非対面検診で補完できた（図1）。その結果、検診率が増大し、過去最大の検診率であった 2020 年度の検診結果と比較しやすくなった。なお、2020 年度から代替検診が正式な検診として集計されている。

東北地区の動向として、これまで高齢化、障害の重症化、介護の高度化の進行などとまとめてきたが⁴⁾、ここ数年は障害の重症化や介護の高度化に合致しない傾向もみられていた。ただし、この傾向が真の動向なのか COVID-19 流行による影響なのかは不明であった²⁾。以下に、主に 2020 年度と比較しながら、スモン患者群の現状と動向を考察する。

最低年齢はもちろん年々上昇しているが、年齢の中央値は横這いであり、85 歳以上の比率も増大しているわけではない。また、身体的併発症は全員が有していた。したがって、高齢化と併発症による影響はほぼ飽和状態にあると考えられる。

もちろん、視力障害と歩行障害では重症の比率が増大しており、「一日の生活」でも重症化の傾向が見られる。しかしながら、診察時の障害度での重症の比率、長期入院・入所の比率、身体合併症の各カテゴリーや記憶障害・認知症を有する比率、Barthel インデックスの階層の比率などは、それぞれほぼ同じであった。また、介護に関して不安に思う比率が横這いであることから福祉サービスの定着を、「いま以上に介護が必要になった場合の見通し」から現状維持が多いことを、それぞれ読み取ることができる。

以上から、障害の重症化や介護の高度化の進行が一旦高止まりしたことが示唆される。対面検診の減少など COVID-19 流行による影響は否定できないが、真の動向である可能性が高いと考えられる。ただし、後期高齢者がすでに 72.5%を占めていて、今後、障害の重症化・介護の高度化の再度進行が懸念されるので、健

健康管理、体力維持、併発症の治療などが引き続き重要である。

E. 結論

令和4年度の検診結果から、東北地区スモン患者群において障害の重症化と介護の高度化が高止まりしていることが示唆される。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 千田圭二ほか：令和2年度の東北地区スモン検診結果．スモンに関する調査研究班：令和2年度総括・分担研究報告書：51-55, 2021
- 2) 千田圭二ほか：令和3年度の東北地区スモン検診結果．スモンに関する調査研究班：令和3年度総括・分担研究報告書：54-57, 2022
- 3) 千田圭二ほか：平成20年度東北地区におけるスモン患者の検診結果．スモンに関する調査研究班・平成20年度総括・分担研究報告書：25-27, 2009
- 4) 千田圭二ほか：令和元年度の東北地区スモン検診結果．スモンに関する調査研究班：令和元年度総括・分担研究報告書：55-58, 2020